会報

No. 54

平成13(2001)年3月15日

京都府図書館等連絡協議会

事務局
京都市左京区岡崎成勝寺町9
京都府立図書館内
TEL (075)762－4655

私と図書館

金剛流二十六世宗家
金剛永謹（こんごうひさのり）

私には以前よりどうしても読みたいと思っている本がある。それはドイツ人の能面研究家、フリードリッヒ・ペルジンスキー氏の能面書である。ペルジンスキー氏は能面研究の第一人者で、同氏の書いた能面書が最初に出版された能面研究書とされており、その後に続く能面研究の先駆けとなったことはほぼ間違いない。

私の祖父、先々代の金剛巌が昭和二十六年に『能と能面』という本を著しているが、その中にもペルジンスキー氏の事が述べられている。祖父は実際に同氏に会い、色々と能面談を交わしたようであるが、やはり同氏の鑑定力は見事であったらしく、「能面のことが本当によくわかる人」と語っているのである。

能楽師としては当然のことかもしれないが、私も能面をこよなく愛する者の一人であり、でき得る事なら日がな一日能面を眺め、至福のうちに日々を暮らせたらとさえ思っている。そんな私であるから、ペルジンスキー氏のようなドイツ出身の人が能面に魅力を覚え、熱心にその研究に取り組まれたということに、能面の持つ、国の違いをも越える魅力を改めて実感するのである。そして同氏の能面書にはいかなる内容のことが記されているのか、是非とも手にとって読んでみたいと思うのである。しかしその本がなかなか手に入りにくいものであることと、金剛能楽堂の移転という一大事業による目の回るような忙しさとで、残念ながらペルジンスキー氏の本との出会いは、未だ実現していない。

近年は能面ブームといわれる程に能面を研究する人が増え、様々な能面書が出版されている。私事で恐縮だが、昨年は宗家継承を記念して私も『金剛家の面』という能面の本を出版した。もちろんペルジンスキー氏のような能面論を展開することは出来ないが、能面を鑑賞するにあたっては本物に触れることが一番であると考え、様々な角度からの鮮明なカラー写真をふんだんに取り入れることによって、能面の魅力を出来るかぎりそのまま伝えられるように私なりに心を砕いたつもりである。自分の能面書出版に際してのこのような思い入れを振り返っても、世に送り出されたすべての能面書には、それぞれの著者の能や能面への深い思いがこめられ、独自の工夫が凝らされていることと思う。そしてそれら数多くの書によって現代の能楽はさらに奥深さを増すことが出来るのではないだろうか。能楽に携わるものとしては、公共の場としての図書館にこのような能楽の書が充実し、多くの人々が能の魅力に触れられるようになることを切に願ってやまない。

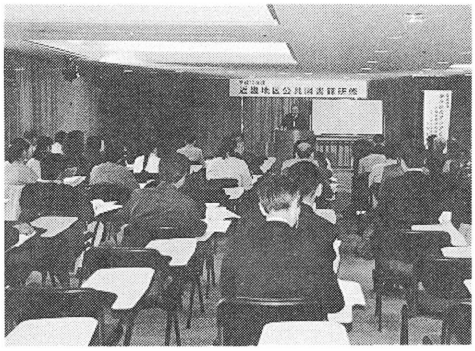
今日において図書館が担う役割は非常に多くなり、それにともなう機能の充実ぶりには目を見張るものがある。京都にも近々、最先端のコンピュータ技術を取り入れた新たな図書館が設立されると聞き、私は今からとても楽しみにしている。また、愛知県豊田市の行った、複合文化施設として能楽堂とコンサートホールと共に図書館を併設するという試みは、芸術・文化の発展の可能性を大きく広げる、大変画期的なものだと思われる。私もこのような図書館を今後ともおおいに利用していきたいと思うが、まずは身辺が落ち着き次第、ペルジンスキー氏の能面書をゆっくりと探しに行きたいと思っている。

平成十二年度近畿地区公共図書館研修（文部科学省の委嘱事業）が、京都市図書館の当番で、京都アスニーを主会場に二月五日（月）から九日（金）までの日程で開催された。

新世紀は公共図書館としてもっとアジアに目を向けることが重要との上田正昭氏の基調講演を皮切りに、図書館の今日的課題、方向性や将来像に関する提言など七つの異なったテーマの講演、「よみきかせ・紙芝居・口演童話」の演習、さらには二か所の施設見学が実施された。

とりわけ「京都デジタルアーカイブ研究センター」の見学、「元離宮二条城」での障壁画の模写作業の見学には目を見張るものがあった。

五日間にわたる多彩な内容の科目に延べ四三六名が参加し、新世紀の幕開けにふさわしい研修となった。



平成12年度近畿地区公共図書館研修

平成十二年度近畿地区公共図書館研修に参加して

長岡京市立図書館　三谷　千里

五日間の日程の内、二日目に参加させていただきました。

「情報リテラシーと図書館利用教育」では、生涯学習を支える場としての重要さと共に、情報化が進めば進むほど対面によるコミュニケーションの必要性が出てくる事等、学校図書館での実践を基に、今後ますます進む情報社会の中での図書館の進む方向性を、また「図書館と資料保存・補修」では、酸性紙やメディア変換等、現在の資料保存の問題点とその取り組み方についての、基本的な考え方を、「国立国会図書館関西館（仮称）の概要」では、関西館の開館で三分される機能・蔵書への対応などを具体的に聞かせていただき、大変参考になりました。

いずれも、今後の活動に活かせていきたいと思います。

研修講演録

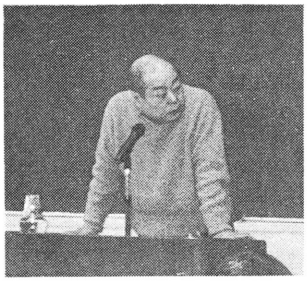
市民図書館という理想のゆくえ

『季刊・本とコンピュータ』編集長　津野海太郎

私が以前『図書館雑誌』で公共図書館がベストセラーを何冊も購入することに対してかなり意図的に挑発的な文章を書き、論争が続いたことがある。

そこで書いたことは、公共図書館における市民サービスの再定義の必要性である。六十年代後半に始まった市民図書館運動において、市民サービスとは、それまでの使いづらい図書館に対する革命のスローガンであり、旗印であった。貸出優先・利用者の読みたい本をできるだけ購入する・サービスの質の向上等といったその運動は、八十年代には一定の成果を収めたのだが、同時にそれは確立されたものとしてマニュアル化されることにより、幾つかの矛盾を抱えるものとなっていった。

運動が始まった当初は、経済的には満たされていないが知的欲求の旺盛な市民に対して、図書館がそれを支えることに意義があった。複本購入も図書の選択を利用者に委ねるというその運動の原則に基づいていた。



しかし、八十年代初頭を境に日本の出版文化が消費文化に飲み込まれていく過程の中で、雑誌そして単行本の寿命が短くなり、マーケティングリサーチによって作られた、すぐに売れる（がすぐ売れなくなる）本が大勢を占めるようになってきたのである。

それに合わせるように読者は流行の本を追いかけるようになり、図書館利用者も流行の本に一度目を通しておきたいがために図書館に購入希望をするようになってきた。

そんな読者＝市民が変わっていく中で、図書館の市民サービスは、新しいサービスの原則を確立していく必要がある。市民の要求をそのまま受け入れるのではなく、行政の側の必要性に基づく検討を行った上での市民サービスでなければならない。

本には商品としての側面と文化財としての側面があるが、図書館はその後者を支えていることを十分意識し、売れない本であっても文化的価値のある資料を購入して出版文化の衰退に歯止めをかけるべきである。そうすることが今後の公共図書館の存在感を増す方策の一つであると思う。

平成十二年度近畿地区公共図書館研修における講義要旨を広報委員会の責任でまとめました。

新加盟館紹介

弥栄町公民館図書室

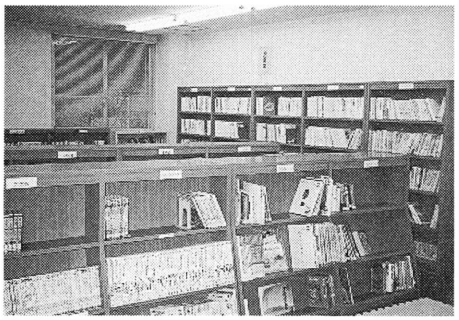
今年度から京図連協に加盟いたしました弥栄町公民館図書室です。

弥栄町は、京都府の北端の丹後半島の真ん中に位置し、人口六千人余りの町です。

当図書室は弥栄町公民館の一階にあります。開室時間は、午前九時から午後五時までとし、閉室は祝祭日とお盆、年末年始です。町民のみなさんが、利用しやすいよう平成十一年八月より日曜日も開室しています。

現在蔵書冊数は府立図書館からお借りしている本を合わせて約一万三千冊で、利用者数は年間延べ約六千五百人です。

今後ともよろしくお願いします。

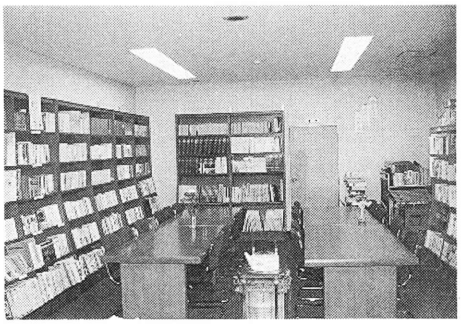


瑞穂町教育委員会図書室

今年度から京図連協に加入させて頂きました瑞穂町教育委員会です。

瑞穂町の図書室は旧村単位に四か所あり、その内一室は月・水・金曜日の午後三～五時、残り三室は第二・四火曜日の午後一～五時まで開室しております。蔵書は府立からお借りしている五千冊を含めた約一万四千冊の図書を一室あたり約三千～四千冊開架しており、規模は小さいですが地域に密着したサービスが提供できるよう頑張っています。今年度から小学校の課外授業に臨時開室したり、来年度には土曜日の開室や総合目録ネットワークに参加するための環境を整える計画をしており、利用しやすい図書室を目指しています。

京図連協加盟館の皆様には、たいへんお世話になりますが、よろしくお願いいたします。



LIBRARY NEWS —井手町図書館—

好評です 出前サービス

「最小の投資で、最大の効果を」井手町役場のあいことばです。

図書館では平成十二年度から次のサービスを増やしました。

一、四月から九月まで開館時間を一時間延長

二、小学校と老人センターへの出張サービス

三、相楽エリア、広域個人貸出しの加入

四、貸出冊数の増加（図書十二冊、雑誌五冊）

などです。

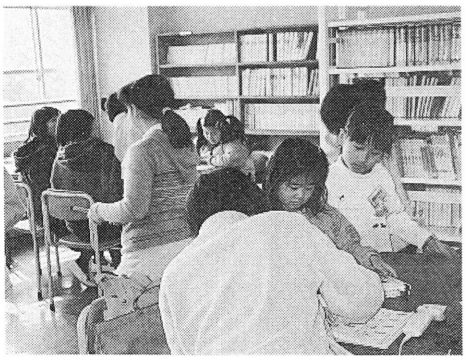
平成六年七月開館当初は、一年間の貸出数が住民一人当たり八冊、今年度の推計は十冊と順調に伸びています。これは、住民ニーズにあわせてCDとビデオテープを置き、図書館を身近なものに感じてもらった事にあると思います。

今年度から井手、多賀両小学校と老人センターに「図書の出前」を始めました。老人センターは施設の開いている時間、学校では水曜日の昼休みと放課後に貸出します。

学校で、貸出業務をサポートする両小学校の図書委員には、本の仕分け（分類）、バーコード、マーク、コンピュータの仕組み等、図書館カウンターでの仕事（貸出、返却）について説明し、各自本を選んでコンピュータ処理するなど、事前研修をしてもらいました。

今のところ、貸出数は両校で一日二百冊弱ですが、来年度以降は図書館のコンピュータ端末を入れ、本や開設日を増やし、職員体制を整えればもっと増えると思います。

将来的には中学校や隣保館、デイサービスセンター等にもサービスを広げていきたいと思っています。



専門委員会ニュース

◎ネットワーク特別委員会

昨年九月七日以来特別委員会は開いていないが、動きを報告すると、「総目ネットシステム」について、南図協が府南部で、府立図書館が中部と北部で意見交換を行った。南図協では、「府立の対応が遅れているため、先が見えず不安感、不信感が募り、市町村の対応も遅れている」との意見があり、府立からは「タイムリーな情報が流せるよう努力する」との答えがあった。また、インターネットにつながると、「各市町村同士で相互貸借手続きする分散化がベターでは」との意見もあったが「検索画面から簡単に貸出依頼に推移し連絡車ともリンクする今回のシステムで、これまで以上に支援できる」と府立から回答があった。

その他各会場では「書誌の同定を見やすくきちっと」「システムの不具合、不都合の責任」「トラブルがハード上、ソフト上、通信上どこに発生したかの見分け」等の質問、意見があり、「府立の蔵書構成の比重を市町村支援に置いてほしい」等の要望があった。

当委員会としては、今後さらに具体的な問題点の調整に努力したい。

◎研修研究委員会

本年度は、委員の改選の年に当たり研修研究委員会の委員も十五名中十三名が改選となりました。未経験者が大多数のなか委員会では、二〇〇〇年「子ども読書年」にちなんだ研修を中心とした三回の実務研修会を開催しました。いずれの研修会も各担当委員の努力により特徴のある研修会となりました。特に昨年九月の宿泊研修会（北部会場）は、「私の出会ってきた図書館のこどもたち」をテーマに、講師の仲野先生の体験を話されました。自分の図書館とのかかわりから文庫活動への取り組みまで、その豊かなバイタリティーに参加者の多くが感銘しました。

また、一月十九日に宮津市で北部の図書館への総合目録ネットワーク説明会が開催されました。北部地区は、中部、南部に比べると公立図書館の数もコンピュータ化も大変遅れていますが、各館で少しでも早くネットワークへ参加出来るよう計画が進められています。さらに、理事担当図書館を中心に、北部でも連絡会を組織し研修研究を深めていく決定が出来ました。

平成十三年度は府立図書館も開館します。二十一世紀のプロローグとして、さらに良い研修会が開けるよう努力します。

◎相互協力委員会

十月の第一回委員会において、相互協力委員も参加する方向性が確認された「京都府図書館総合目録ネットワーク会議」は開催時期が未定ですが、「ネットワーク参加予定館フォーラム」が二月九日府立図書館主催で開かれました。十三年度参加予定館等の職員三十五人（二十八館）が参加して、府立図書館からの総合目録ネットワークについての経過報告及び提起の後、ネットワークシステム利用による相互貸借業務の流れ及び運用上の諸課題について話し合われました。資料提供の流れは、府立蔵書→市町村間相互貸借→府立図書館入手となり、市町村間で提供できなかった資料について府立が市町村支援する。FAX版WANTEDは府立の仕事として継続する。相互貸借の対象資料については京図連協での協議というものです。

相互協力委員会としても三月に第二回委員会を開催して、ネットワークシステム利用の相互貸借業務について協議したいと思っています。

◎広報委員会

今年度も八月十五日、一月十五日、三月十五日と三回の会報を発行出来ましたのも、各専門委員会や加盟館職員の皆様のご協力の賜物です。ありがとうございました。

今号では、関係者のご協力を得まして、金剛流二十六世御宗家　金剛永謹氏にご寄稿を賜り会報に花を添えて頂きました。委員一同深く感謝しております。

会報が会員間のコミュニケーションの一助となるためにも、皆様からのご提言、ご意見、ニュース提供をよろしくお願いいたします。

編集子

今年十月に岐阜市で開催される、第87回全国図書館大会のテーマは「IT時代の図書館像を考える」である。いわゆるIT革命が図書館におよぼしている認識が現場ではいまひとつではないだろうか。資料提供（貸出）は機械化で省力化されているいま、貸出を含めた「情報提供」「情報発信」に力を入れるべきだ。すなわち、情報化社会の中でカウンターでは、人間が機械になってはならない。そうした図書館の模索が求められている。